



技術の継承には……

虎の門病院 森 一 晃

この冬最大のイベントであったバンクーバー五輪も終わり、すっかり春の装いとなりました。日本では冬の五輪というとメダルを獲得したフィギュアスケートやスピードスケートに話題が集中しますが、欧米でウィンタースポーツの花形競技といえばアルペンスキーです。アルペン競技にはダウンヒル、スーパー-G、ジャイアントスラローム、スラローム、コンバインドと5種目あり、ダウンヒルが高速系であるのに対しスラロームは技術系といわれます。この中で日本代表が活躍するのはスラロームです。今回のバンクーバーでは佐々木明選手の18位が最高でしたが、前回トリノ五輪では皆川賢太郎選手が3位との差0.03秒の4位入賞とメダル目前までいきました。そして、シーズンをとおして争われるW杯では、第1シード(成績上位15名)のスラローマーを輩出しています。こうした高いレベルを維持しているのは、選手の弛まぬ努力とともに、引退した選手がスキー振興やジュニア世代の育成に尽力を注いでいることにあると思います。一昔前にW杯で活躍した岡部哲也氏や木村公宣氏は、現役を退いた後、国内有数のビッグゲレンデのスキースクール校長を務めるとともに、自身が冠となるスキー大会やスキーキャンプを主催し、ジュニア世代から日本代表選手まで幅広い層の育成に力を注いでいます。スキーだけでなくスポーツの世界では、このように一流の成績をあげた選手が後進の指導に就くことで、勝つための技術や精神面のタフさが培われ、また次の一流選手が育つという継承の道が確立されていると思われます。

さて、技術系ということで、これを核医学診療に置き換えてみますと、CTやMRIといった画像診断モダリティの発達と多様化、医療経済情勢の変化により病院内における技師のローテーション化が進み、施設内で核医学技術を指導できる専任の技師が減少し、知識や技術を伝える人が少ない状況にあります。多くのモダリティに携わるローテーション化は一人ひとりのスキルアップにつながりますが、時に専門性が薄らぎ技術レベルの頭打ちになることもあります。

今後、核医学検査の客観性を向上させ、根拠のある画像情報を提供するには画像処理の正しい知識の習得が欠かせません。しかし、現在の情勢下では一つの施設内だけで知識と技術を伝えていくことは難しいかもしれません。施設の垣根を越えた地域ぐるみで勉強会や研究会を開催し、核医学技術を伝えていくことが必要であると考えます。ぜひとも核医学専門技師が中心となり、こうした活動の輪を広げていただきたいと思います。これからの核医学専門技師の役割の一つは、個々が蓄えている収集条件の考え方、正しい画像処理法などの知識を多くの施設に“伝授”することだと思います。これらの活動が核医学画像の標準化、共有化につながるものと考えます。

現在、表彰委員会を担当していますが、ここ数年優秀論文賞の対象となる原著が投稿されていないことが残念です。核医学の正しい知識、技術が、核医学を担当するすべての技師の間に浸透することで核医学への興味が深まり、研究活動の活発化とともに論文が増加していくことを期待しております。会員の皆様のご協力よろしく申し上げます。